

# 春の旅行

千 歳 子

左様！ 今頃になつて思ひ出すのは忘れもやらぬ  
 明治三十九年の春休みの旅行です、前年来受持つ  
 て居た幼児等が目出度幼稚園の遊びを卒へて小學  
 校へ行くことに成つたので、新入兒の入園するま  
 で、茲暫く重荷をゐろした心地、此の呑氣な休日  
 を住みなれた都のうちに過ごして終ふのも惜しい  
 事と京阪地方に獨旅と洒落れ込んだのでした  
 金入れの底をたゝいて旅行哉  
 書生時代は眞に氣樂なもの、風暖かに花も間もな  
 く咲き出でんとする臘月夜、茗溪河畔の假住居を  
 わとにして午後十時卅分と云ふに新橋より汽車に  
 乗り込んだのです。丁度三月三十日の晩のこと、  
 て、女高師新卒生の關西に赴任する人々を暖かさ  
 母校の懷を離れ冷き社會の風にもまるゝべく此車  
 中に乗り込んだのも少なからず、殊に休暇の常と  
 て學生の歸省する數多くて随分混雜合つて居たの

でした、耕の着物に全じ羽織、袴はカシミヤの畫  
 少し過ぎたるを、肩には軍人用のズツクの鞆を掛  
 け込んで、是も中古の洋傘一本を持ち懷中には金  
 はたつぷり、腦中は無一物、まことに幸福な旅行  
 よと思ふにつけても座る君教師の高恩を謝さるゝ  
 のでした、品川の夜の海に漁火ちらほらと見渡さ  
 るゝも心地すがくしく、大森と云ふ聲に背て遊  
 びし八景園の間の帳に包まれたらんを思ひ浮べな  
 どして三ツ四ツ五ツと驛又驛を過ぎ行くうちにい  
 つしかと眠りに落ちて奥津蒲原何とやらむ遠くは  
 三保の松原も唯夢の間に打ち過ぎ、濱松といふ車  
 掌の聲に驚き覺めたのは翌朝七時過ぐる頃でした  
 用事あつての旅ではなし、見たい所を見て行けよ  
 と、まづ此處で降りて該町民が赤心籠めて造り建  
 てたる凱旋門を潜り道行く人に物尋ねつゝまづ高  
 等女學校を見に行つたのです、其在在所も知らず  
 校長なる人の姓名さへ知らぬに随分頓狂なる事よ  
 と思ひました、ナニ旅の恥はかき捨てよと若い  
 時分は元氣なものを朝飯も食はずに町はづれなる高  
 女校に行つたのです、素より春休みの事ですから

生徒一人居りませんが、すん／＼門内に入つて行つたのです、玄關に行つて音づれて見ても誰も出て来ず、小使室らしい方へ廻つて聲かけたら一人の女が不思議さうな面持で出て来ましたから名刺を出して「東京から来た者です」とまづ驚ろかしてやりますと案の状「マア御一人です」と云ふのでした「此度東京から竹内先生といふ方が此方へ見える筈でせう」と新卒業生の赴任地を知つてゐるから聞いて見ると「ハイ其の御方の荷物がモ！届いて居りますのです、では貴方様は竹内先生と御同校で、では、△△先生も御存じて御座いませう」と態度一變まことに舊知己の人の様になつて親切に校内を案内して呉れ且つは同女がたつての勤めで校長某氏の御宅にも御邪魔し△△氏にも面會し何かと同町内の教育状況を承はり次いで町内第一の小學校をも參觀したのです此小學校は随分大きくて児童數がなんでも千五百か二千位もあつた筈でしたが確かなことはモ！毫礫して忘れてしまひました、此地で有名なのはピアノの製造場のあつた事と帽子製作の盛んなのださうで巴里あたりの

ペーバを附けて東京で賣つて居る帽子は多く此邊でつくるのだといふ事です、是れ丈見て歩いたらモ！十一時すぎたのです但未だ朝飯が食へんのです武士の子も流石に空腹に困うじましたが御茶の水の清き空氣に育てられた女學生の片端だものどらして／＼縄暖簾などが潜れませう、其儘瀛車に乗り込んで今度は三州岡崎へ行つたのです岡崎には同卒業の友人が師範の女子部に居るのです此町で面白いのはステーション前が相當に賑はしい町であるから是れが岡崎かと思ふと是から鐵道馬車で殿橋といふ處まで行き其れから先の町々が本當の城下なことでした、殿橋で降りて知らぬ町中を覺束なげにくねり廻り目ざす女子部をたづねますと是も亦町はづれ、其の上其附近は焼土のやうな地味なので春日和とは申しながら殊に暑いのですお腹は空く足は疲れる、斯様なると大事なく軍用靴も捨たくなりませうけれども、左様かというて紫の袴の手前何様しても例の暖簾は潜れぬのでした。該女子部の校舍は却々立派な新築でしたが地方の學校は何れも地面が充分なので庭や運動場

がいかにも廣々として羨やましいなど生意氣な事を考へて大玄關の前に立ち例の名刺を差し出さうかと思ひましたが一、番不意打して友人を驚かしてやるのも面白」と疲れ切つたうちにも何か呑氣な所があるのです、デク、デク、した女使が出て來ましたから「△△先生は、一と問へば唯今舎監會議で」と答へるのです。去年迄は身生徒監の監督の下にありし人の「思ふと小供相手に無邪氣に暮す保姆の我身にはなんだか噴き出さずに居られなかつたのです」「何一寸した用事で來たのですから濟んだら緩り會して下さい名は云はずもわかるですから」とまづ寄宿舎の應接間に案内させて待つて居たのです、ところが其會議がまた大へん長いので終うと、居眠りを始めました頃入口の戸がギューと開くと共になつかしき友人の顔があらはれたのです、豫め何の通知もしてないのですもの東京三界から此の短かい春休みに岡崎下りまで誰がやつて來やうと思ひませう、如何にも驚いたといふ表情で「アラマア」と云うたきり私の頭から足の先まで見降すのです多分魂のみが來

たのかと裾の有無を見定めたのでせうよ、よく來たでせう、マア例の元氣には」と互に袂別以來の物語りに中々時のたつのも知らぬのでした寄宿舎も新築の完備したので随分廣い花壇もあり庭の中より遠近の山嶽を臨めるやうになつて居て女生徒が浩然の氣を養ひ得る様な心地ゆたかな設備なのです、舎は此友人といま一人の先輩とで萬事監督をやつて居るとの事で歸省せぬ數名の女生徒の手傳ひで友が整へし種々の珍味に舌鼓打つた後は廣々とした花園に萌え出づる若草を踏んで共に將來の希望を述べ現在の愉快を語りて過ぎ去り易き此一夕を惜んだのです、友は其夜神に向つて此の會合を感謝した様で「無論基督信者ですから翌くれば四月朔日、早朝旅仕度を急いで友と共に岡崎城址に赴いたので、郊外と云うても舎よりは程遠からぬうちとて徒歩で一見公園の如き樹木鬱たる小道に入りますとやがて城址につくのでした高く低く積み上げられたる石垣の幾百星霜、風雪に曝され雨霽に胃され今尚朽ちずに居る様は昔徳川の本城たりしより劍戟閃々幾多の勇士が血を

流せし凄き歴史を語らんとするもの、様に見られ  
 ました城趾の中に設けられたるさゝやかなる社の  
 傍、紅なる桃花一もと饗し顔に匂ふのも三河武  
 士の内助たりしやさしき婦人等の面影に似たるに  
 遙か彼方帯のやうに輝くのは矢矧川だと友が申し  
 て居りました、限りなき今昔の感に話ます、興  
 に入り今暫しと友の引き留むるをもまたの折に再  
 び會はんと辭して此度は腕車僱て徳川氏先祖八代  
 の墓なる大樹寺といふに香手向け更に蜘蛛手の八  
 ツ橋見んとて舊東海道筋を進みましたが道の兩側  
 には老松列をなして緑の墜道過ぐる心地なのに、  
 車上風ゆるやかに日影暖かく濃美平原の一部とや  
 見渡さるゝ廣き田畑の麥青く菜の花黄金色に、都  
 にて書で別れた櫻の花も此處には早今盛りにて森  
 の木蔭、陋屋の軒端などにちらほら匂ひ出でたる  
 飽かずめでたり、果ては昔諸大名が參勤交代の行  
 列の様など思ひ浮べて獨り笑ひに入つて居るうち  
 二時餘りにして八ツ橋寺に着いたのです、古びた  
 る堂宇の見るから昔愁ばるゝに坊近く咲きそるへ  
 ると女椿の人まぢ顔なるに心引かれて案内乞へば

老僧立ち出で、萬づまめやかに昔し語りするに旅  
 の勞れも打忘れ心千年の昔に馳せて左中將が風流  
 の面影愁びそが自ら物せられしと云ひ傳ふる阿保  
 親王其他の像どもを始めかさつばたに名得たる池  
 をも見、さて引きかへして安城のステーションよ  
 り例の汽車にて名古屋へ行つたのです、此處にも  
 同級生が二人ほど奉職して居るのです、名古屋は  
 三府に次ぐ大都會ですから今更そが見物話しもよ  
 しませうが、友の宅に鞆を捨て置きしまゝ旅の勞  
 れも休めずには有名な金城を見に行つたのは、よせ  
 と云はれても御話し致たい事の一つなのとす、一名  
 古屋の城の金の鯨鋒！とは三歳児の時から聞いて  
 て居た事、どんな美觀か？、今其を見るのだと思  
 ふと心も空に馳け出したのは丁度夕方の五時すぎ  
 で豆腐屋などの忙はしげに行き交ふ頃でした第三  
 師團に屯して御國を守る兵士が吹き送る夕暮の喇  
 叭の音に道を辿つて兵營近く進みますと時恰も日  
 露戰役の終局を告げた折として白衣を纏ふた幾多の  
 傷病兵が新設された假收容所の窓近く暮れて行  
 く春の夕べを打ち眺て居るのでした、都を離れて

から數多き凱旋門に送り迎へられ通りつて此處まで來りましたが悲壯なる思ひになやむ傷病兵に遇つたのは是れが始めていしたから我身の幸福に引きかへて彼人々が心情あはれ深き何となく誠めらるゝ心地して此の旅も徒らに愉快を追ふの念に驅られず何物をか收得すべきものぞよとの嚴かな聲が心の底に響いたのでした兎角して城の後方なる練兵場にははりし時はすでに午後の六時でしたから行き來の人も漸く絶えてさらぬだに心靜まる春野の夕ぐれ清く豊かなる大濠の水際に立ちて近く氣高き五層樓を仰き、花やかなる夕陽に金色更に燦然なる天主閣屋上の美觀に心奪はれしあの時の愉快はまた忘れ難い一事でした、歸途程近き招魂社に詣で散々路を間違へて友の宅に歸つたのは餘程夜更けてからの事で其夜は十二時過ぎるまで語りあかし翌二日にはまづ縣立の高女を參觀し次いで生意氣にも縣廳に參り教育課の吏員に當市幼稚園の様子などを話して貰つて市立幼稚園といふのをたづねまづ久々に愛らしき幼兒等に接する期を得たのでした、保育者の方々も中々よく研究

なされて居らるゝ様子で種々の標本成績其他の研究材料を惜しまずに見せて下さつたのは何より嬉しい事でした、名古屋は流石は大都會で此幼稚園を始め邦人の手に成れるものも外國婦人の設立に係るものもあるとの話でしたが始めて當方へ旅した事として京坂地方へと心せかれ保育狀況の大略丈を聞いて市中の見物を致し確か？同日の午後二時すぎ名古屋をたつて奈良へ行くべく關西線に乗つたのでした（續く）

春の聲

松の家

柳の眉の深みどり

花の口紅うるはしく

霞の衣を装ひて

早蕨の手に足引の

山は笑へり鶯と

蛙の歌も面白や

浮かれて遊べ人々よ

春守る神の我が姿

名は佐保姫と呼ぶ鳥